『人間光村利藻』

— 「一日一話」がなんと 821 回 —

(1) はしがき

史談会開催日：不明
（昭和 44 年 12 月：印刷新報掲載）

■語る人
安雲 宗一 氏

＊ 録音テープ無し

神戸から美術印刷文化の 2 巨頭が出ていることを郷土の人達に知っていてほしい、それは実に日本印刷文化史上神戸の持つ誇りであるからである。

そのひとりはコロタイプおよび写真凸版系における光村利藻翁で、ひとりはオフセット HB の市田幸四郎氏で、いずれも故人となっている。

このふたりは同じように斯界のために全財産を投尽し各銀行を潰した。世間からは狂人だ馬鹿だと笑われたが、その真価を知る者は、甚だ少ないようだ。神戸の印刷文化を語るにはまず、このふたりを対照とするのが妥当であろう。

私は直接関係を持つ光村に対しては、自信を持って語り得ると思うが、市田氏に関しては他の関係で知己であったが、印刷に関してはその一端を知るに過ぎない。市田氏に関してはその全貌を知っている岡部五峯氏に聴くべきである。

ゆえに、私は光村を土台として、神戸における印刷文化の一面を語ることにする。ただ残念に思うことは、一切の資料を戦火に失っているので貧しい頭脳から明治、大正の古い事項を絞り出して述べるのであるから、間違いや年のずれが無きにしもあらず、ゆえに、もし間違いが見つかったら教えていただきたい。因みに大体において光村翁存命中、交流していた「一日一話」に記されているものと相違ないように思う。

ここに「一日一話」について説明しておく。昭和 25 年の暮、翁が病床にあることを知ってその慰安のため毎日ハガキを投函するこ

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

とを始めた。翁は非常に喜んで毎日返事を書かれたのが始めで、翌26年6月1日より大体1000日の目標を持って書き始められたのが、「一日一話」で毎日の通信とも2通宛が配達されることになった。

「一日一話」は翁の自叙伝に等しいもので、821回で絶筆となった。毎日2通宛配達されるハガキを毎日スクラップに貼付したものが12冊の大部となり、翁の伝記の資料ともなるわけである。このスクラップを見るに680回当たりから眼病が進んで段々手探りで書かれ、ついに大文字となり正眼の時より5分1字取りとなり、最後の20通は代筆となっている。死の3日前までで終わっている。私もちょうど、4年44日毎日書き続けて投函したのであった。

人間・光村利藻

明治維新直後、山口県の片田舎から出て、神戸港において毎日外国船員に接して財を造り、汽船を購入して海運業を始め、神戸、門司間を往復して巨額の産をなして一躍百万長者となった。長門屋弥兵衛は品川弥治兵衛、伊藤博文など同郷の友好も大きな力となって従六位に叙せられ、水木姓を改めて光井村出身のゆえをもって光村姓を名乗り、初代光村兵衛として長者番付に載る。

その弥兵衛の一粒種、二世利藻は明治10年2月11日北長狭通5丁目に生れた。

今は皆、故人となった小寺謙吉、森本六兵衛の3人は幼少よりぼんぼん仲間の竹馬の友で、ともに県立師範学校付属小学校を卒業した。小学校を出ると上京し、慶応を卒えて19歳にして現秩父宮妃殿下の伯母にあたる松平藤子と結婚し、4男1女をあげた。女児は、折、長男は現光村大崎の社長、次男は三光オフセット株式会社の社長、三男は写真学校出身、写真において名をなし、著書もあったが、戦時中病歿、四男は東京インキ専務各斯界に名をなしている。

彼の趣味は多種多様にわたっていた。頭脳明晰、一を知って十を知る逸物であったが、我侭に育ったから欠けたところも多かった。明治22、3年頃小学校内で「蛍雪」という雑誌をコンニャク版で出したのが印刷の発端で23年の暮れには木製の印刷機を発明して児玉活版所から活字を取り寄せて表紙を活版印刷にした。

24年の頃、父弥兵衛翁は眼病で盲目となって仏に帰依して明道協会を起こし智徳会と関連して、智徳会雑誌を発行した。31年頃まで続いていた。明道協会には目賀田種次郎が主となり相当盛んな会で

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

あったらしい。初代弥兵衛翁は剃髪して浄源と号して明治 25 年 2 月 20 日成仏して祥福寺に葬られた。

父の死後、彼は写真に関心を持ち始めた。彼が元町市田写真館に亡父葬式行列の写真を見せてもらってその不思議さに驚き、自邸に市田左右太館主を招いて教えを乞い、邸内に暗室を設け、機械を購めて写真を始めたのがそもそもの写真道楽の第一歩であったのである。

明治 25 年父の死後、上京して慶応義塾に入学、学僕泉谷八木らを相手に小西や浅沼藤吉らの誘導のもとに当時、素人写真の団体で「大日本写真品評会」というのがあった。これに入会してから彼の才能に拍車がかかった。何しろこの会の連中の視野の大きいのに驚きと喜びを感じて彼の考想は変わってきた。

— 印刷技術に大きな“ひかり” —

(2) 光熱の変遷

神戸市企画課で調べてみたところによると、明治 21 年に神戸に電灯会社が出来て、最初 2 百灯、それから 10 年後の明治 30 年頃 3 千灯になり、36 年にやっと再度筋の工場に引けた。この時はすでに 5 千灯を越えた。当時それ程電灯が点くのが遅々としていたから、電灯は珍しいものだった。38 年に三宮神社西トーア筋に友人が薬局を開業した頃、田舎からきた女中に灯を点けよと命じたら電灯にマッチを摩ってまごまごしていたという笑話が話題にのぼったものであった。明治 34 年、私が神戸に来た頃居留地や県庁に電灯が点いたというので見に行ったが不思議で珍しかった。一般には浄灯（石油ランプ）が灯されていた。

洋灯のことで今なお忘れることの出来ないことは、毎日の掃除と注油であった。その頃関西写真会社の工場では、毎日 30 灯の洋灯の始末をするのであった。それは係りの横井さんの大きな悩みの一つであった。

洋灯は硝子製で油壷、灯心、金具、ホヤ、弦、笠の 5 主要部より出来ている。中でもホヤの掃除が厄介なもので、硝子の薄い円筒であるから破れ易い。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

普通棒先に布を巻き油をつけて内外とも油拭きする。この際ちょっとのことで破れる。この30数台の洋灯を掃除するのに3時間を要する実に嫌な日課である。私は毎日横井さんが苦労するのを見て、同情に耐えなかった。何とかならぬかと手伝っているうちに私は、このホヤの洗浄を試みたところ実に容易に出来るので横井さんに教えてから3分の1の時間で仕上がり、破損もなくなった。その方法は細砂と釜の灰とを混ぜたものをホヤの中に入れて適宜の水を加えて、両方の穴を掌で塞いで上下に振ると内部の曇りはすぐ落ちる。そして水洗いをしてホヤ立てに立てて乾かすのである。これは、油拭きより簡単に清いになる。横井さんはこの時の喜びを死ぬまで語っていた。

明治36年には、瓦斯灯がランプに代り、さらに翌年には電灯が引けた。電灯になってから瓦斯は熱用になる。瓦斯マントルは42年頃まで一般に使用された。電球は初め炭素棒であったが、後タングステン球に代り、昼間色も出来、製版撮影焼付にアーク灯使用となり、現在の蛍光灯に進んできた。現今では写真及び製版には日光はなくとも差し支えなくなった。

熱においても石炭、瓦斯、電気と実に簡単に光熱の変遷は印刷にも大きな能率変化をもたらしたものである。

神戸沖大観艦式と錨山

さて、明治36年の春になると光村本邸には海軍将校の出入が繁くなった。これとともに写真部の活躍が目に見えて烈しくなった。軍艦や水雷艇の入港ごとに写真班は出張したり、将校の本邸入り、艦体軍器その他撮影など平素より異っているのが目につく。これが当春神戸沖で展開され、未曾有の大観艦式の前ぶれであったのである。

3月になると神戸市がこの大観艦式を記念するため諏訪山東峯に海軍徴章の錨を描きて、これに植林し、その1本ごとに海軍旗をと電灯を結びつけて満艦飾が施こされた。後に出来た錨山の隣に松樹植林の市章山と相俟って神戸港の偉観となった。

4月になると海に山に大々的に装飾が行われ、前々日には沢山の船舶が入港し、大小艦艇が続々と沖に錨を降ろすと全艦艇が満艦飾を施こし、夜はイルミネーションで海も陸も火の海となる前夜祭である。4月10日市中は県庁、市役所、裁判所、商工会議所、税関目抜き街の両入口一様にアーチを建て電旗飾を施こし大国旗、日の丸

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

海軍旗が交差され、各店頭はもちろん各家ごとに国旗海軍旗提灯が飾られた。各神社や町内ではだんじり、山車、舞台など設えてその前夜祭が展開されたのである。

いよいよ当日となった。午前 10 時、天皇陛下お召艦三笠が肖艦を先に堂々静かに運行し、艦列前線に至ると 21 発の皇礼砲が一斉に発射され殷々轟々、山壁に木霊してその勇壮言語に絶するものがあった。

— コロタイプの一大革命 —

(5) 写真部の活躍

光村は神戸沖大観艦式の光景を撮って大新聞社に提供すると同時に原板をコロタイプ工場に回して写真画報や絵はがきに製作した。出版部は大阪で開催されている第 5 回内国勧業大博覧会と勝ち合ってどうにも動きが取れなかった。

もちろん、工場もこれを見越してコロタイプ手刷機を倍加 14 台としていたのであるが、なおこの有様であるから第 2 の拡張案を協議することにした。

このとき写真銅版部でも昼夜兼行で製作して新聞社に提供したり、また出版部では大阪国文社で画報を印刷して大衆販売その他広告などで工場とともに目の回るほど多忙を極めた。

コロタイプミシンの据付

大阪における内国勧業博覧会は既に開催されて出版部の売店も写真部も開いて美術出版や絵はがきなど 14 台のハンドでやっていたが、何分神戸の大観艦式が勝ち合ったが、大阪は先に準備しただけに止めて神戸の観艦式に全力を注いで一段落してからまた大阪のものにかかったが、結局営業部と工場の対立となった。

このとき、大阪の野上支配人が所用で上京して、東京印刷がタイプミシンを入れて好成績を上げていることを聞き込んだ。彼は帰阪、直ちに人を派してその機械製作所を探知して、TPK のものと同型機を発注した。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

この機械は石版ロールの改造されたもので、四裁判であった。約1ヵ月で完成されて神戸に入った。

神戸工場では既に高尾鉄工所へ5馬力蒸気機関を注文していたから到着のコロタイプミシンと同時に組立にかかる。6月の終わりに完成して試運転をした。これに当たったのが津幡仁であった。このとき始めて蒸気機関が動き出した。

これから数日、製版部と印刷とで研究したが製版が駄目、手刷とその調子が甚しく異なる。

手刷においては、革ルーラーの後膠ルーラーで自由にインキを調節出来るけれどもロールには（この機械は革肉棒2本、膠肉棒3本）肉棒を平均に使用するだけで、部分的に調節することは出来ないから行詰まらざるを得ない。そこで津幡、野上を連れて家長自ら上京して、東京印刷の秘密を探ぐることにした。相当の費用を使って努力し遂に製版主任を説得して、神戸へ1週間の予定で連れて帰った。

その結果、製版の相違印刷法の調節などが早く判って非常な好成績を得て彼を大いに遇し5日間に切り上げて帰京せしめた。幾分手刷と異なるけれども大衆用には一向差し支えない。第一、能率の点が、何しろ手刷の4倍以上でコロタイプ印刷の一大革命であった。これまで絵はがきが手刷の場合、4面に付き、1日2百枚平均であったが、ロールでは8面に付き、5百枚も刷れるのである。ロールにおいては調子つくまでヤレ刷が多い欠点がどうすることも出来ない。

第5回内国勧業大博覧会

明治36年4月、大阪における天王寺公園を中心として、第5回内国勧業大博覧会が大々的に開かれた。わが国商工業の中心地とあって実に大規模なもので、農商務省が大阪の実業家と取り組んで渾身の力コブを入れたもので、農商務省はこの準備のため3年を要したとのことである。

これより先、光村家長は大阪南地宗右衛門町伊丹幸の豆千代を落籍して北浜3丁目河岸に妾宅を構え、写真部を併置し、立派な写真スタヂオを設置して、若林を主任とした。豆千代の関係から妹分の八千代を始め、一流の美妓を撮影して、美人写真帖や絵はがきを作り博覧会各会場の絵はがきとともに場内特設売店で売出した。なにしろ特設売店では売品とともに実物の美人をしてサービス時間を定めて売出したから、飛ぶように売れた。それだけ神戸工場は忙しかっ

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

たわけである。

— 巴里世界博入選で大祝賀会 —

(6) 美人写真が人気

その頃の印刷用紙は現今のように多種類あって、お好み次第というわけにはいかぬ。舶来紙ケント、ワットなど高級ものと和製に帳簿紙があった。製紙場で写真帖や絵はがき用に張合せたものなど作らせた。ワット紙は印刷の際、湿気を与えて印刷していた。舶来紙は高級ものとして使用した。また、和製洋紙でもコロタイプ印刷は、膠湿版であるため、紙面がむくれることがあるから製紙場でもとくに、注意したようであった。この売店では、高級ものとしてボカシ刷およびダブルトーンが流行し、よく売れた。

博覧会特設売店でサービス時間を開いてから非常な人気を博した。これについて面白い話がある。このサービスに出る芸者は大阪及び京都の美妓ばかりで神戸を無視しているとして、当時花隈大尽といわれた楠公前の大時計店の神戸一の粋人坪井徳次郎さんが光村と親類関係や友人関係、遊蕩仲間でもあるので光村写真部に神戸花隈を仲間に入れないことを憤慨して、神戸も入れることにしたことも有名であった。それほど坪井さんは勢力家であり、また彼の“勧進帳”は玄人も及ばなかったことは誰も知っていた。令息は東宝の劇作家坪井正直氏である。

伸びゆく工場

博覧会が終わると日露の国交がひどくややっこしくこじれて政治家の往復が烈しくなった。同時に軍需関係の工場が活気づく。コロタイプだけではどうにもならない。写真印刷も増える一方で、とくに写真銅版もその製版が研究されて優秀なものが出来、それに適する印刷用紙も出来るにつれ、どうしても手許で出来ざれば不便の限りである。それで、写真銅版の印刷出来るロールが入用となった。大阪支配人野上喜雄が築地活版所に前任していた関係で、彼が上京して優良機を 1 台（24 頁）購入して、37 年春、神戸工場に据え付けた。ロール方の名を忘れたが、熱心に研究し、上達したので、関西では立派な印刷をしていた。

何分、現今のようなアートペーパーがなく、最良の銅版印刷機は、絵はがき用には帳簿機、雑誌、チラシには百四というのが当時のアー

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

ト機械であった。活版機が入ってから必然的に活字の小数が入って、ネームぐらいは印刷された。日露戦争が始まってからまた増設された。後に活版部が出来てコロタイプのネームも印刷するようになって、青年は兵役関係で出入が激しくなった。

巴里世界大博覧会写真出品

青年光村は日本風光を世界に紹介するのが、われらの義務だと主張したので、風景写真と決定し、まず、京都金閣寺の雪景を描いた。京都の旅館と連絡をとって降雪を待った。ちょうど2月20日頃、今日の降雪は大丈夫、積むに違いないとの報で3人で出かけた。うってつけの積雪、雪降中、降止中、種々撮影して好ネガを得た。今1枚を考慮中、和歌浦出島の冬の夕照を狙った。1週間滞在して好機を得て撮ったのが良かったこの2葉を出品することにしてその申し込みをした。

印画を製作するまでに日本特有の額縁を大阪芝川会名の蒔絵師、山内好師を呼んでデザインを命じた。ひとつは、雪錦模様金蒔絵、ひとつは雪輪の刑部梨地としたのが、1年がかりで出来上った。

出品印画紙は熱心な努力で大きさは新聞2頁大の等面ブロマイド引伸写真で、独特の着色をなした立派なもので東京でもその界の権威者に下見、その優秀さに驚いたほどであった。

出来上った蒔絵の額縁に装填されて外務省に持込んで検閲の技官を驚かした。

明治34年の春開会された巴里世界博に出品されて、大使館員も大いに喜んだとの報があった。その夏、大使館より外務省に入電があって「1等に入選した」とのことで非常に喜んだ。

巴里世界大博覧会総裁より外務省を経て、1等賞状と金牌が贈られ、光村では大祝賀会を催した。実に日本写真界の名誉をこの神戸がおったわけである。

— 明治維新を成しえた者と… —

(7) 世界最大の写真印画

青年光村の本来の道楽は写真である。それが発展して写真印刷に及び、ついに原色版にまで到達したのである。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

写真術においても資本を惜しまず研究されたからこそ、その実を結んだので犠牲なくして得られるものは現世にあるべきはずがない。先年巴里の世界博で獲得した金牌に力を得て、この度行われる第５回内国勧業博覧会に出品する意図はその時からである。

東京六桜社小西六が光村に刺激されて、長足の進歩をした。その小西が光村に協力して、大計画に小西を大いに働かせた。その功績は大いに認めるべきである。

その大計画は 10 尺四方の印画紙を作ることである。小西に相談すると臭素紙では最大限が３尺で長物は出来るとしても、幅は如何ともなし難いとのことであった。ほどほど考えた結果、絵絹に着目した。絵絹に臭素銀乳剤塗布ブロマイドエルムションの試験を六桜社で成功したので、京都織元で予定の大幅絹の製作を遮二無二発注した。ついに９尺には足らないが８尺ものが織られた。六桜社で全力をあげて研究の結果、ついに完全なる塗布に凱歌を揚げて数人がかりで神戸に運んだ。この容器を想出するトタンの１丈余の径６寸位の丸筒３本を東京から宰領して、神戸駅から光村本邸へ運入れたのは明治 35 年の夏の夜であった。

光村本邸の一室は引伸暗室に臨時整備されて翌日から引伸写真の製作にかかった。何分現今のように電灯があるわけでもない。光源は太陽である。引伸作業も工作を要する。写真部総掛りで毎日試験焼きをして 10 日後にいよいよ大作にかかったのである。

須磨浦夕陽と洲崎の四手綱

伸写された臭素絹布を野外暗室にて現像するのである。

関西写真工場の４棟の中庭にあたる場所の屋根に丸太を渡してその上に幕を張りて星明りを防ぐ。８尺５寸× 11 尺木製バスを２個作って絹布が水に濡れても絵が見えるように内部に白ペンキを塗って作って置いた。バットの上に流動容易ならしめるため丸太を中間に入れ、現像液の流動を容易ならしめる。バットの四方に暗室ランプを置くまた、バットの両側に水道ホースを置く。バスは一方を現像用とし、一方を定着用とする。現像液を４斗水瓶に用意して置く。定着用バスに定着液を満して置く。

まず、現像用バスに水を張って、その中に伸写された絹布を浸すと、ただちに水を捨て、主任者（柴田常吉）の一・二・三の号令で、壷の現像液を二方よりバケツでかける。15 秒で画像が出る。3、40 秒

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

で現像が終わると現像液を捨てて両方からホースで水をかけるとすぐ用意していた竹棒にかけて、定着液に 6 人で運ぶ。そして 4 枚を現像した。定着が終わると、定着液をあけて水洗をする。この水洗は 4 時間ぐらいで済むが、この作業は深夜 2 時を過ぎた。水洗が終わると乾かすのであるが、これが実に大変であったが、引伸印画は完全に出来上った。何分にも電灯がないので暗室ランプは実に不便なもので今考えてみるとよくもやったものだと思う。

この印画の内、2 枚を表装して、着色し、8 寸縁の額縁に入れてみると実に優美なものだ。これをみた光村の眼に、かつて見たことのなかった歓涙が玉となって流れたと中尾が語っていた。

しかしながら写真印画が、とくに技術が優れているとは考えられない。まず、大きいこと。絹地であったこと。着色が独特であったことなど、実に世界的なものであろうことは、今からでも想像が出来る。現今はカラーで容易に出来るが……

明治維新は青年が果たした。この光村が果たした時も青年で、しかも幼稚な明治中期のことで光村に協力した技術者、六桜社の牧野専太郎（後の二代目小西六）その 1 人として 20 代を出たものは 1 人もいなかったことは明治維新と相まって大いに考えさせられるではないか。

— 「真美大観」買収金 5 千円也 —

(8) 写真銅版と亜鉛凸版

明治 23 年、初めてドイツから輸入されて結城林造（東京蔵前商工）、田中猪太郎などにより研究されて、29 年博文館発行、文芸倶楽部に写真が載ったのが日本では初めである。これが神戸に入ったのは 5 年後の 34 年である。

その頃、この写真銅版の製版は東京と神戸だけで、大阪で光村が始めたのは日露戦争後であった。関西ではニュース写真銅版を大朝、大毎、時事などに供給していたと思う。神戸新聞や新日報には、大正の初めまで送っていたように覚えている。

新聞社に輪転機が入ってから写真版は紙型でなく原版を輪転鉛版にはめ込んで印刷したものであった。製版のほうでも輪転胴に取付

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

けられるように左右を曲げる機械を作って曲げて送ったものであった。版は左右写真の部分を３分ぐらい残して、その部分を曲げるとともに、版も彎曲するのである。

明治35年頃から新聞に写真が載るというので大へんな喜びであった。ニュースといっても早くて２日目、大抵は３日目以後になることも珍しくなかった。現今の午前２時の写真ニュースが朝刊で見られるなんてその頃は想像もつかぬことであった。

亜鉛凸版は銅版に遅れて明治の終わり頃やっと世に出たもので盛んに使用されるようになったのは大正７、８年頃からである。

真美大観

大日本仏教真美協会は京都を中心とする仏教美術関係の仏像仏画、仏具など仏教芸術を内外に紹介する目的で組織されている会で、僧侶出身の田島志一氏の主宰する会員５百を有する領付会である。

この協会が発行している「真美大観」は純美術の写真帖、コロタイプ印刷写真半切型、それに日本独特の木版刷原色五葉、英和両文の説明とも45枚の大写真帖、純日本紙、和綴じ製本で本邦最高の美術書である。

明治34年末、金子印刷所支配人、山下官十郎を金子の了解を得て入社せしめた。彼は商才にたけ、社交術に優れ博学多才、威厳的な志士面をした人物、その割に若い者に甚だ親切な慈しみのある人であった。光村では彼を常に招こうとしていた。彼が歳末の挨拶にきた際、家長が直接に彼の意を正したところ、大いに働きましょうと即決して金子に交渉し、急速に入社の運びとなったのであった。

明治35年１月、山下の進言により、大日本仏教真美協会の発行した真美大観を買収することになり、金５千円（当時）で譲渡調印を終わり、主幹田島志一も同時に入社、中尾新太郎、山下官十郎を理事に定め、家長自ら会頭となる。そして大日本仏教真美協会を大日本真美協会と改称した。

明治35年２月、田島は、「真美大観」第１巻より４巻まで既刊全製版を東京小川一真および築地活版所より引き揚げ、神戸関西写真工場へ引渡しを終わった。そして、いよいよ第５巻の印刷から神戸山の工場で印刷することになった。これは神戸工場にあっては実に大したものである。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

写真は関西写真が印刷し、本版は東京活版及び製本は金子印刷に担当させることになった。このため、金子では京都より和綴じ製本職人を雇入れるなど、また説明に要する欧文活字を調達し、和文も築地の印刷に遜色ないよう陣容を整えて万全の注意を払った。

また、編集者田島が東京にいては不便なため、京都に住居を置いた。一方、山下をして下山山手通８丁目に事務所を設けて同居、北川事務員を付けた。

「真美大観」は田島、山下の両雄をもって着々と進んで第 11 巻まで発展した。しかしこの時一大難関に突き当たった。それは日露戦争である。日露戦争が開戦すると国民は美術に心を置く余裕を失った。そのため会員は４分の１に減り、甚しく悲境に陥った。

— あっといわせる美術品 —

(9) セントルイス世界大博覧会

この時、外務省より、明治 38 年５月、米国において世界大博覧会開催の出品勧誘があった。

理事会において田島は「当分内地において拡張の見込みはないから外国に伸びよう」との提案があり、賛成して田島、山下は計画表を出して、その実行に向かった。そして発行所を審美書院として会計を独立した。

セントルイス世界博覧会に出品するものを次のように決めた。

1. 既刊のものを２百部に満つるまでに再版、刊行のこと

2. 協会の事業を拡張して、業態を審美書院として、支那名画集、光琳画集、元信画集、若沖画集を発行すること

3. 世界最大の日本独特の木版刷（原寸原色版画）

これらに要する予算を理事会に提出して、山下が委員長になって計画通りに進めることになった。

まず、大量の和紙を江戸川製紙会社へ発注したのが、明治 37 年

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

の晩春であった。

その年の２月、日露戦争が始まった。当時の印刷部は戦争大勝利とあってコロタイプ工場はこのままではどうにもならなかった。そこへ審美書院の画帳が入ったのだから工場を拡張せざるを得なくなった。コロタイプ手刷の内、半数を能率的な石版ハンドを改造して２倍形とした。これは従来のコロタイプ印刷機と比べ、30％の能率が上がり、ロールも絵はがき 16 面で完全に刷れるよう工夫が凝らしてある。製版も大いに研究を続けられて 1,500 通しの耐久力も出るようになった。初期の印刷に比すると雲泥の相違である。ロールは調子さえつけば平均調子で刷れる特長があり、ロールでなければ出来ないものさえある。審美書院のものを印刷するのは通数が少ないから手刷りを向けねばならない。一方ロールで刷っていた安物は網目版にして活版ロールに廻し、得られるから能率的には前の博覧会図録の時のような困難はあるまいとのことで態勢を整えた。

審美書院出版に対する撮影は田島の編集に基づいて柴田常吉が当たることになって、半切カメラを持って京都、奈良その他に出かけた。撮影された原板は製版して印刷に回されたが、準備が上手く整っていたから順調に運んだ。ただ、非常に困ったことは、青年が兵隊に徴られる。その補充に苦労が多かった。一方、大本版の計画は田島、山下がそれに当たった。

国宝を複製

世界の美術家をあっと言わせる程のものを物色するに美術家学者に選定を依頼したが、ついに京都仁和寺の国宝、「孔雀明王」を複製することに決定した。直ちに、宮内省、博物館、美術学校の協力を得て、手続きを完了、撮影に取りかかったのである。

絵画の撮影には普通、野外用鏡玉では正確に写すことが出来ないので、これにはホーカスの長い製版用レンズが必要である。苦心の結果、完全に撮影が出来これを原寸、（３尺×６尺）の印画を仁和寺に持参し、図案主任の沖田が現物の通りの着色をした。最後に版画大家の田村鉄之助が現物と対照点検して、持ち帰った。

これより先、田村鉄之助は命ぜられてからこの大物を版刻するのは、世界で始めての大事業であることを痛感し、始めは躊躇したがなんとか自分の手でやりたい信念から彼は５日間、熱祷を捧げて決心したと言っていた。なにしろこればかりは彼の秀腕に待つ外はないのであるから、家長も田島も彼を尊敬した。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

巨匠田村は起った。版木たる桜木の乾燥しきったものの入手に２ヵ月を要した。また、印刷用紙布の大判の烏ノ子及び絹布、いずれも千度以上のバレン刷に堪え得るものでなければ駄目である。それに木版用インキ水浴し出来ること、光線にも強いものを用いることなど多くの難関があったが、見事に克服して彫刻にかかった。

— 欧州へモーレツな売り込み —

(10) 大木版画、完成

まず、版木に張りつける下像 12 枚を貼り合せた。

親版を先に彫る。いく判かを彫刻しては印刷する。その色調を大体原本どおり着色してある原稿と色合せをなし、時折りあらかじめ許可を申請してある仁和寺の原本と色合わせに出張する。ついに２ヵ年を要して、実に 1,380 度刷りという世界記録を完成した。

明治 38 年日露戦争は連戦連勝の春陽を浴びて光村家長、田村鉄之助、田島、山下、泉谷、中尾、野上、柴田など 10 数名が原本対照のため京都、仁和寺に出張した。仁和寺管長も博物館長、美校々長、同教授、美術家など集まってもらって、原本と複製版画の対照を催した。いずれもこの傑作に賛美の声を発して魅入ったのであった。この時前に立った田村巨匠は身動きもしないで彼の眼からハラハラと涙が流れていたという。2 年の間、一心不乱に霊魂を打ちこんだ大作であるのだ。

完成された孔雀明王の大木版画は、あらかじめ用意を命じていた京都の伏見春芳堂が原本同様だと太鼓判を押した。仁和寺管長及び博物館長の校閲を経て紙本のものが外務省へ送られて本邦より出品される多くの出品物とともに戦時中セントルイスに発送出品されたのである。

この時、印刷されたものは、絹本の紙本各 5 枚で天皇に献納したほか、博物館李王など買上げとなった。今、残っているのは博物館のほか 2 枚ぐらいであるが民間のものは、そのほとんどが戦災に遭ったのであろう。

出品された孔雀明王は計画どおり世界の美術家の目を驚かせた。世界博総裁は、名誉金牌を贈ってきた。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

審美書院セントルイスへ売店

日本美術を世界に紹介の目的をこめてセントルイス世界博に乗出すための準備も整い出品の大木版も発送済みとなって、田島は八木富次を会計に、他売子１名の３名が出品売店物の真美大観、支那名画集、光琳画集、元信画集、若沖画集、日本百景等を荷造とともに神戸から渡米した。荷物が遅れて、セントルイスに着いたのが、夏期休暇に近づき、やっと開店が出来た。始めは非常に好調で、この調子なら会期中に相当の成績が上がるものと喜んでいた。ところが、米人富者の暑中旅行で、7、8 月は皆無となるため予想が外れた。そのうちに閉会となったので目もあてられない。田島はなんとしても予約を得ようと帰途欧州へ回って帰朝することにして、八木らを先に帰して、英国へ向かって発った。

英､国､伊の３ヵ国を巡って大使館にすがって相当の成績をあげて、晩秋、帰朝した。

日露戦勝ブームに乗った美術展覧会

明治 38 年春、奉天大開戦大勝のあと、市立大阪博物館から光村とタイアップして展覧会開催の相談があったので、図案の沖田秀舟をして、計画を進めた。

その計画は園内に模擬店を設け、休憩所を３ヵ所、売店１ヵ所を作る。模擬店は無料で貸与し、売場の１割を造作の費用にあてる。売店は関西写真会社の製品を販売する。模擬店に南北新町等の美妓を数人、交代でサービスさせることにし、本館に光村出版部の製品を陳列、展覧博物館側は平素より異った新らしいものを加え、今までのものの陳列替えをしてすべて目新しくした。

写真部では南地の美妓として「元禄姿」「千代田の大奥」の粉装を撮影することにした。衣裳を高島屋に、風俗は食満（けま）南北に教えを乞い結髪は南に担当させることにした。

撮影を終わった頃から編集して厚板を神戸工場に回してコロタイプ印刷に、用紙は、普二様とし、ケント厚紙に刷って着色、普製は帳簿紙を使った。袋は沖田の図案により石版印刷にした。この頃石版の高級なものは大阪中田印刷所へ回した。当時、この風俗絵はがきは最高に優美なものであった。

本館入口に富田屋、八千代の等身大のブロマイド印画紙を型抜きして、実物のような感じを与えるマネキンに仕立てて置いた。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

— 大光村計画、一歩を踏み出す —

(11) コンノート殿下

明治 39 年、英国皇帝のお使者としてコンノート殿下来朝の節、出版部発行の「日本百景」の写真帳を新調して殿下に献納した。これはコロタイプ写真に和英両文で説明を加え、工員が全力をあげて製作したもので、殿下は大いに喜ばれ、従者一同口を揃えて賞讃されたと当局から謝辞が伝えられた。

光村の躍進

光村が写真を以って海運に貢献したことは、前に述べた通りだが、その関係で当時、海軍次官であった斎藤実（海軍大臣朝鮮総督、内大臣、2.26 事件に暗殺された）の厚遇を受けた。斎藤子爵の縁続きで当時三菱神戸支店長であった木村久寿弥太氏を知り、三菱と関係を持った。

明治 39 年春、代議士俣野景孝という人が光村家相談役として就任した。彼は名望家で刀剣の鑑定の一人者であったことで各方面に知遇を得、甚だ好感のもてる人物、博学、多才の人格者とされていた。これまで光村が発行していた刀剣類の写真帳「鏨の花」（タガネのハナ）の編集を依頼していたが、入邸と同時にその編集を嘱託した。

光村は彼をして自分の狙う印刷の大一貫作業を起こそうとその計画を図った。まず、彼を上京させて海軍省に斎藤子爵を訪問して懇談した。子爵は、光村さんは多年海軍に貢献された人で海軍としても援助すべきだと直ちに岩崎男爵に自ら同道、紹介懇談の結果、三菱神戸支店長木村久寿弥太氏に伝えられて三菱との関係が始まり大光村の計が成就されたのである。

光村合資会社設立

俣野相談役によって三菱との交渉が始まり、岩崎氏のお声掛りと相俟って、話はスムースに進み、明治 39 年、光村一族社員となり資本金 30 万円の光村合資会社が設立されたのである。

この計画は東京を本店とし、麹町、内幸町に事務所と出版部を置き、「海軍」、「笑」の 2 雑誌を発行し、麻布に敷地 1,500 坪を印刷工場の予定地にした。大阪に営業部、写真部の他、印刷工場を新設して大阪支店とし神戸は現工場を拡張して、一貫作業工場とする案がたてられた。その第 1 期計画として、神戸工場新築工事が進められる

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

ことになった。機械類は、ドイツ商館ベッカーに、写真関係は小西六に発注された。

先にドイツに留学していた泉谷氏一が帰朝してから、大光村の計画にドイツ人を招聘することになり、その子弟として在学中の俣野理事の甥の栗原禎と、1 年遅れて卒業する安雲を同時に付けることにした。

栗原は東京工業学校図案科で 40 年 5 月卒業、安雲は 41 年 5 月に卒業。安雲は途中、日露戦争に徴集され 6 ヵ月間で復員復校、写真製版分科で製版を専攻した。安雲の卒業する一学期前から光村は整理途上にあって栗原は既に退社していた。それで最後の学期は学資の中絶でアルバイトをして、無事卒業後、整理中の神戸工場へ復帰して、40 年春、来朝していたトイブナ氏に師事したのであった。

ドイツ人を迎え 3 色版を開始

明治 39 年の秋、ドイツ留学中の泉谷氏一が帰朝したのであるが、彼は」初め工学を学ぶための留学であったが、光村が 3 色版を望むに至って、そのほうに専念した。しかし、彼が帰朝してすぐにその技術を始める程、熟練しているわけでなく困ってどうしても原色版技師を入れて優れたものにしたいと思い泉谷をして研究を託した。

彼はかつて自分の教師であったヘルマン・トイブナをドイツ大使館を通じて交渉を試みた。その結果、3 年間の契約で来朝することになり、明治 40 年 2 月、彼は夫人と 10 才になる女児を連れて来朝した。ドイツ領事館員が毎日きて 2 時間通訳をしてくれた。また、泉谷夫妻も時々通訳をしてくれた。彼は滞在中、金髪嬢と結婚して新婚旅行を兼ねて帰朝したのであった。

彼が来朝してから彼の専門工場を設計、新築することになり完成するまで一時、既設を併用することにして栗原禎と河内清次、川島文治の 3 人を付けた。

5 月下旬、工場の西端に 40 坪の 3 色版専門の平屋建の 3 色版科を新築した。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

— 辣腕を揃え最上の印刷物を —

(12) 原色版登場

トイブナの第一着の製版は光琳作“六歌仙”と応挙の“牡丹図”の原色版及び本邦で始めて作った凸版２色刷で完成した製品は実に立派なものであった。

当時、現今のようにバンクに乾板はなかったから、普通乾板をビナクローム色素で染めて再乾燥したもので、分解撮影をした。それからこれまでは木版をもって原色を３百度刷内外で印刷して、やっと実物の感じを知るのであったが、３色版では、３色印刷するだけで原色を味わえるのであるから実に驚異的なものであった。

３色版は非常な好評を博し、京都博物館の国宝の絵画彫刻が製版されて、日本美術誌に挿入され、美術愛好家を非常に喜ばせた。

なにしろ、当時の分解撮影は四切写真暗箱一式。４貫目もあろうと思われる頑丈なもので、それを現場に運ぶのだから大変なものである。使用のレンズは複写用のもの、また分解用漏光障（フィルターは青・赤・緑の色硝子の後ろに全色乾板パンクロート）を取付け、レンズを透して写るピント硝子の位置にてフィルターを通じて３段に写るように装置してある。これで撮った原板は黄、藍、赤の各原板が出来る。この原板から陽画板を作り、レタッチしてから綱の原板を作って、銅版に焼付けて製版する。出来上がった版をアート紙に黄、赤、藍の順序に３原色インキで印刷すると原色が出来上がる。これが３色版、または原色版というのである。しかしながら撮影の際のフィルターの色調や印刷用インキが不純であるから３色で出来るはずの原板もレタッチを必要とし、また印刷インキによって補助を要するから、その原図によってインキの色の加減や４色版にする必要も起こる。３色に製版する苦労より、４色にして印刷するほうが、はるかに容易である。

ドイツ人の癖かも知れないが、トイブナ氏は周到な準備と心の用意を十分にするために着手までの時間の空費はわれわれの想像に余るものがある。であるから民間営業には大量のものならではと到底営業にはならないようである。しかし、出来たものには不良のものが無くこれには大いに教えられた。

私は 41 年５月、蔵前を卒業してから専属となり、暫くはトイブ

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

ナ氏に指導を受け、大いに得るところがあった。彼は途中、1 年間休暇をとって帰国、再朝してから明治 43 年 1 月満期となって解約。暫く滞在して帰国した。

光村神戸工場の機構

明治 40 年春、関西写真会社発展解消と共に新しく発足した光村合資会社は工場を拡張、現敷地の 6 倍を買収した。現在では、日本基督教団、再度筋教会の存るところが事務所に当たりその下手が写真場、上手が食堂で実に 3 百坪の大工場が建てられた。

工務部長に印刷局から益田勝利氏を引き抜いて、また平版に本間由六氏、凹版に瀬川氏、コロタイプに吉崎寅之丞、活版に柴田、凸版に久松、ヴィクトリヤに中村武八、電胎部に猛藤、調査及び紙材に千本、井上、製本に森、写真部に本田、写真銅版に宗重雄、奥山など、ずらりと有力技術者を東京の印刷局、凸版会社、築地活版、東京印刷などから引抜いて勢揃した。中でも凸版会社から事務営業に精通する剛の者といわれた羽田蘇明が入社して煙草専売局の包紙の印刷を引き受ける対策として凸版会社の宝物にしていた凹版彫刻の瀬川民蔵以下、電胎電気印刷各技術者 7 名を引抜いたことは当時の凸版会社の困却は言語に絶するほどであったと後に凸版の重役から聞いた。

地元の職工員百余名を集め、まず、カタログ製作に腕をふるった。また、宮内省拝注の皇室及び各宮殿下の名刺を始め各版式によって素晴しいカタログを出し、業界をあっと言わせた。

— 減給に耐えて 3 色版を発明 —

(13) 発足した光村印刷会社

神戸工場閉鎖とともに大阪の工場も閉鎖した。あとを受けた森本六兵衛社長を始め、スタッフ一同、雄々しく発足したのであったが、日が経つにつれて、見通しと違い厳しくなってきた。毎月報告を作成して報告するなど当然のことながら多忙な仕事の上に経験のない繁雑さに幹部一同悲鳴を上げた。重役はその日からでも机上の利潤が上がるものと思っていたらしいが、そう始めから成績が上がる筈はない。それで、不成績の課はどんどん責められる。とくに 3 色版は研究中に属するもので自然所属の銅版部写真部は成績は毎月マイナスであった。それに旧社長の光村からの注文が多くても入金が少

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

ない。西洋人の給料は別としてもその材料は毎月報告するのであるからたまらない。その期末にボーナスどころか材料浪費ということで減給２ヵ月の処分を受けて工務部高台前に掲示発表された時は随分癪にさわった。しかし自分は研究中の身であるから大いに望を抱いていたので少しもやましいとは思わなかった。工務部長始め、各主任連は大いに同情してくれた。自分も案外、平気で研究を続け、重役連も別に悪感を抱いてはいなかった。私は光村に関係があり、他の職員と存在を幾分か異にしていた点もあり、そのようにされたのかとも思えた。

人工３色版の発明

人工３色版の発明が神戸から出現したものとして認めておいていただきたい。

明治 42 年の春、トイブナ氏と京都・嵐山に天然色の撮影に出かけた。専門カメラをもって撮った黄･赤･青の３原色を３原色分解フィルターによって嵐山風景４組を持ち帰って製版した。内１枚は失敗したが、３組は製版され、立派な出来栄えであった。高級ものが１ヵ月を費して製版したものだから、その原価は著しく高いものとなる。絵葉書として売出すことは不可能である。それから私は夢中になって研究を続けた。

世界的な製版法

ある日、この嵐山の原板を並べてみて、各色の差が甚だ少ないのに気付いて、精密に研究した。原板の差が少ないからそれを修正しつつ製版するのである。この位の差なら何もフィルターに頼らないでも工夫して１枚の原板で３枚の陽画を作り、レタッチすれば出来るはずだからである。しかも１枚の原板を使用するのであるから、合刷に狂いの生ずる心配はない（毛筋１本の差でも狂っていたらば発色不良）。この点を見てすぐに工程をとって、製版にかかった。３色の各色版の製版を終わり、試刷してみると実に立派に出来て、思わず歓声を上げた。私は有頂天になってすぐに上京、母校結城教授に特許出願を申し出た。先生は、「これは世界的なものだ。美しいものは沢山あるが、大体が 10 数度刷りのものだ。この製版法は他に類がないから、必ず特許は受かることに間違いはないと思う（結城教授は特許審査官）。しかし、君は絵が描けないから特許を取っても折角のものが発達しないと思うので特許出願は見合わせたらどうか」との意見であった。この時、先生がこれは世界的なものだと裏付けされた言葉に満足して、出願を止めた。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

私は先生に、出願は止めますから１年間発表をしないで下さい、と約束して帰って、その話を光村にした。家長も自分と同様に喜んでくれた。

結城教授の言われた「君は絵が駄目だから…」という点から少年を徒弟に選ぶことにして、中宮小学校の就職指導のＡ先生を訪ねて、卒業見込み生徒中から５人テストして入れた。後にその内３人は優秀な製版士になった。

この時、会社では、私が急に休んで上京したり、材料浪費による２回目の減給２ヶ月の処分を受けたのは痛かった。

― 口封じの解雇処分に怒る ―

(14) 絵はがき問屋

光村家長から早速、嵐山八景の原板をよこした。それを試作して、印刷３千組を仕上げて、当時、日本一の大問屋である京都朝日堂から売り出してみるとたちまち売り切れるという人気であった。

朝日堂から売り出してから次々と新版が出来た。京都各所、祇園の鋒、祇園、都おどり、美人写真など、たくさんの製版が出来て、大阪、奈良、和歌浦・神戸など各名所や祭行事など各地の絵葉書が出来るようになったのは、それから２年後ぐらいであったか。光村大阪出版部では、いよいよ大絵はがき問屋になった。

製版を神戸から東京へ

困ったことが起きた。光村出版部で資金が枯渇して版代、印刷代も支払いが遅れて、ついに中止されることとなった。この場において話合いの上、工場内で１台、ビクトリヤ機を借用し印刷工を別に向けることにして、東京より、ビクトリヤ工、杉盛録郎を付けて仕事を続けることにした。それから大正３年の春まで続いたが、神戸で製版・印刷していてはどうにもならないので、東京の中央に移すことにして、大阪に残っていたビクトリヤ２台を東京都内に移し製版は菊地製版所に委嘱することにした。

その後、大正５年頃に東京光村より、少年２人を神戸工場に製版修得のため、派遣してきた。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

杉村支配人、益田工務部長らの了解のもとに、北沢亀太郎、海老名貢の２人を私の自宅より通勤させ、６ヵ月間で手ほどきして、帰京と同時に自分も同行して神田神保町の借家の屋根の物干場に写場を造り、一方に暗室を設けて製版を始めたが、容易に出来ない。大部分は菊地製版所にさせていた。

大正７年、私が光村をクビになって、自営した時から毎月 15 日間を手伝うことにして東京通いが始まった。

製版所を興す

大正７年３月 30 日は忘れることの出来ない日であった。

その日の午前 10 時、私は重役室に呼ばれた。曰く「君の担当する課の内、コロタイプ課を残して他の銅版、３色版、写真の３課を暫く廃止することとなった。気の毒だが、君に辞めてもらうことになるので本日限りとする。明夜は君の労に報いるため、夕刻、魚庄楼で送別会を開いて報いたい。あまり突然のことで驚かれたことと思うが、実は、ここの事業整理が君の知るところとなると光村さんに知れると事が面倒になるので口止めしておいたわけであるから…」と言うのであった。「来月分の給料は欠損が続いたが出すことにする。これは少しだが重役の志だから受けてくれ」とのことだった。寝耳に水だ。気も転倒せんばかりであった。旧光村の関係もあり、涙を飲んで引き下がり、暗室に入って２時間あまり黙祷して心を落ち着けてから部下を集めてこの旨を伝えた。反抗しても無駄だ。１ヵ月分の給料は呉れるから転職先を探せよ、それも出来る限り斡旋するから、と宥めて涙金を包んで渡す。血を吐く思いであった。随分人を馬鹿にしている仕打ちだ。その頃の資本家はそれが普通で解雇手当でも出すのはまだ良いほうで、事業所整理に涙金など出すところはない。であるから過分の慈悲だとも思っていた。

翌日、魚庄楼での慰労会は活版課長の藤木梢氏と自分と２人の幹部の犠牲者のためだった。会社では私がクビになったら直ぐ東京へ行くだろうと思っていたらしい。私も東京へ行きたかったけれど、３人の子供との５人家族を養うことは出来ないし、それに東京は健康にも不向きであったから躊躇していた。

会社もさすが気の毒に思ったのか、杉村専務は会社の機械一切の必要物件を譲渡するから、製版所を始めてはどうか。条件は３年間分割払いとし、1 年を据置く、代価は原価（償却しない原価）としよう、薬品材料の残存品は添付のこと、で、言われるままに感謝して開業

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

することになって、その準備に取りかかった。

— 製版所を開業、報われた苦労 —

(15) 動き出した安雲製版所

まず、工場を物色する。葦合区内、横通 4 丁目雲中小学校前の薬屋の店舗を譲り受けて、安雲製版所の看板を掲げ、その裏続きの友人の不要工場の一部を借り受け、工場の設備をした。元の部下から希望者 48 名を入れて、苦楽を共にすることにした。メンバーは、岩垣栄を主任に、坪田軍治を銅版製版に、本田清一を凸版製版に、中川を仕上げ工として大正 7 年 5 月 25 日に発足した。

当初の得意先は筆頭に光村印刷、明輝社、神戸新聞、福音社（後の中外）、角丸、大木、秀文社、松本、馬場、開国堂、小橋、小玉、明石印刷、吉田、健石などが頭にある。やや遅れて大阪、桃谷順天館（生命線）ヘラルド、後藤、上山、井上、日本商標など次々と増えてきた。

最初に明輝社の辻氏が郷土史編纂中で楠氏の遺物及びこれに関する物件が写真版となるもの、合わせて 2 百余あり、君の工場の都合で余計に製版してくれとの注文に、ことに辻氏の理解ある同情に誠意をもって製版に当たった。

辻氏は、東京、大阪の見積は坪 10 銭で 133 線、君は 9 銭で引き受けよとのことで喜んで引き受けてから 8 ヵ月ぐらいで完成したが、3 百個以上になった。なお、個人としては光村印刷の只野支配人は、営業の指導者格で助けてくれたことは忘れなかった。

当時、神戸における印刷界で写真版を印刷する工場は前記の通りのように覚えているが、実際は 34 店を除けば、月に 1 個か数個の注文しかなかった。ハンド 1 台を持って営業している印刷所も入れて、神戸部に 18 店、西に 7 店ぐらいであったであろう。写真版の経験ある印刷所は稀であった。

開業当時は、ほとんど注文がなく、私は毎日市内の印刷屋を回って、写真版の印刷法を教えて歩いた。何分、実物を持って教えなければわからないので、写真を撮って写真版を造り印刷まで手を取って教えて歩いたものだった。今でも忘れられないことは、兵庫県の大木印刷の大木強太郎氏とその得意先である西宮内町の呉服屋に行って

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

店頭を撮影し、写真版を造り広告文案までして、十六切のチラシ千枚を印刷した。写真がチラシに入ったので、珍しく効果的であったことに店主も喜びそれからそのチラシを見本にして各方面に宣伝した。印刷所は写真入りの印刷は倍の印刷料が取れるというので、注文が増えた。

印刷に使用するルーラーの適当なものが必要であることを説きその改良にも心を配った。

その甲斐あって、２年目には３倍の注文があり、３年目には従業員に昇給が出来た。木版屋は、脅威的な態度であったが、かえって凸版の注文をよこすようになった。苦心もだんだん報いられて輸出入のカタログ製版も盛んになり、エアーブラシや写真の撮影方の研究によってカタログに自信が持てるようになった。

余談になるが、深江の神戸商船学校の吉利校長と相識る仲となって、かつて私が、藤前丘校生時代に、原書を写真複写し直して、青写真にして教授に使用したことを話した。校長はすぐに登校し、それをやるから頼むということになった。

原書を輸入すると、教授すべき箇所を青写真に焼付けて、その時間割に応じて生徒に配り、教授する方法をとったところ、非常に効果があって、ついに校内に写真部を設け、印刷部をも併せて設備したことは当時、非常に感謝された。そして、これ以後、戦争の始まるまで私の良き得意先であった。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries